

実生新花と花の謎 その13

桃映(ピンクの二色花)

相模原市 清水 弘



図録 31 頁参照) という品種です。この品種の特徴は雌しべ(芯)が単色の濃紫色で、立弁に赤味が加わっていますので、違いはすぐ判ります。恐らくは長井あやめ公園から増殖用の親株として持ち出される際に、取り違いがあったものと考えられます。会員の皆様方の中で、「長井小紫」と名札のついた株をご所有でしたら、開花期にこの

〔隠れた二色花〕

今回紹介する『桃映』(写真上)は、光田義男氏作出の肥後系桃色二色花『惜春』を先祖に持ち、色彩はそのままだ、花形を江戸系に置き換えた品種である。類似花に加茂花菖蒲園作出の『翠映』があるが、異なる点は上弁がキリッ直立したピンクで、下弁がより澄んで白色に近いという二点にある。このような色彩の品種は少ないが、多数の品種を良く観察して見ると、紫色の単色品種の上弁の中に、このような色彩が塗りこまれている品種がある。例えば、以前皆さんに「長井古種花菖蒲図譜」を配布した際に、下記の記事を付け加えたかと思う。

〔参考記事〕本図録の表紙及び 15 頁の写真は「長井小紫」という品種です。鮮やかな瑠璃紫色の三英咲で、雌しべ(芯)が白っぽいという特徴を持ちます。品種同定の際に有用で最も信頼性の高いとされる朝日新聞社出版の「花菖蒲大図譜」に記載されたものと一致しております。

一方、現在、普及し「長井小紫」と呼ばれている株は、実際は「長井古紫」(カギフィルムサキ:

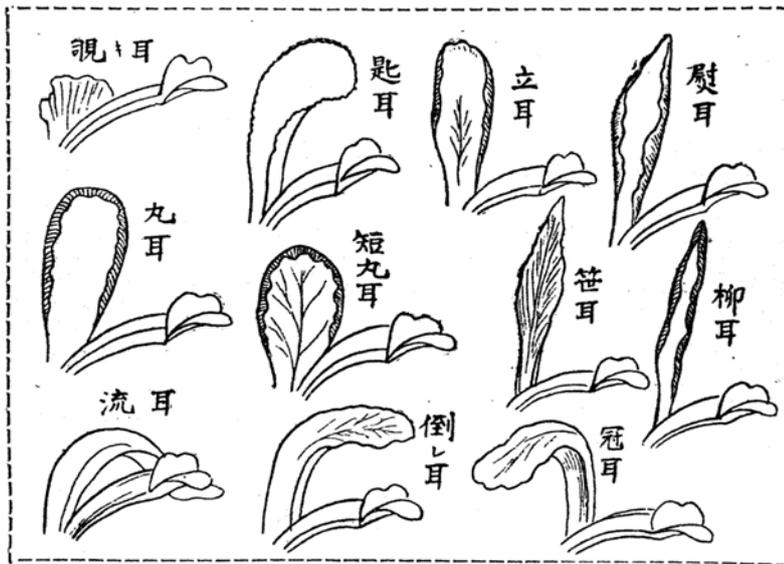
ような観点からもう一度花をご覧になっていたいただきたいものです。長井系花菖蒲の品種同定の際に、きっとこの図録が役に立つと思います。

〔二色花解説〕

判りやすくいうと、一枚の画用紙に三英花の輪郭線を書き、上弁と下弁の双方に瑠璃色の絵具を塗ったものが「長井小紫」の色彩である。一方、「長井古紫」の方は上弁だけに、桃色の絵具を足したものである。つまり、「長井古紫」の方は手が込んだ作品といえる。両品種への好みから行くと、あっさりした色彩を好む者は「長井小紫」を、より濃厚なものを好む者は「長井古紫」を好きと言っているのだが、ご本人達は直感的にそれと感じているだけで、大抵の方はこういったことには踏み込んではいない。

〔上弁の形〕

色彩だけで『桃映』と『翠映』とを区別するには一花で比較することは難しいが、上弁の形でなら、一花での区別は可能である。花菖蒲の花形全般を理解するためには、先ず満月会の基準をマスターしなければならない。満月会では



上弁を耳弁と呼び、上図のように分類していた。1940年刊行の雑誌「農業世界」付録「花菖蒲の作り方」に収録された図の転載です。満月会では、耳弁の形は芯の形態と共に花の良否を決定する最も大事な要素と考えていた。「花容を上面から見た場合に耳弁が垂弁の間に拡がって、それが整然と隙間のないように拡がっていないといけない」といい、具体的には上弁の形を12種類に分け、受耳が最も良く、笹耳や覗き耳は最も下位と位置づけました。良いものから順番に羅列すると 受耳>熨斗耳>立耳>丸耳・流耳・短丸耳・倒し耳>笹耳・覗き耳 となります。

これは下弁や芯の豊満性と調和することを求めた結果ですが、共に江戸系である『桃映』と『翠映』の形を見る時にも大変参考となります。『桃映』は‘立耳’、『翠映』では‘丸耳’に当る形となっている。また、『翠映』の上弁は熊本系品種一般と共通して、弁縁が内巻きとなる性質が強いが、『桃映』ではアイロンで押したように平状となっている。

このように花菖蒲の品種を見る時には、色彩の似ている品種を横に並べて、形を徹底的に比較するという作業が非常に勉強になる。さらに積極的に各系統の古花中の白花品種のみを収集、色彩にごまかされないようにして、比較

栽培することが育種家として大成する近道である。花菖蒲の実生選抜の機会があれば、是非、この分類図を参考にして欲しいと思う。もし伊勢系や肥後系等を目的として育種されるならば、豊満な花形をもつ下弁に対して均整の取れる受耳、熨斗耳、立耳等が良いことは異論がないと思う。こういったことは一般の美術品にも当て当て嵌まることであるが、花菖蒲においては全体のプロポーションとそれを生かすディテールの美

しさ、つまり細かい部分の完成度によって価値が定まってくる。例えば、松阪古花では、かなり拡大した上弁に加えて、芯にある蜘蛛手という細かい部分での完成度がその価値を高めていることは流石である。肥後系の六英花にしても、大立芯や大崩芯に見られる薬片の発達や繊細さが美術品としての完成の域に入っている。伝統の重みに革めて敬意を表したい。

最後にもう一つ小生の実生新花『桜山』を紹介しよう。下の写真がその花ですが、上弁が発達して黄目が出来ているので六英花に分類される。しかし、よく見るとその上弁は下弁の大きさと比較して一回り小型となっている。つまり、三英花と六英花とを区分する決定的要素は、その大きさではなく、上弁の黄目（蜜標）が現われるか否かという点にある。黄目が出たり出なかったりする中途半端なものは、過去に淘汰されてきたという次第です。



